
 ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2006年9月～10月）

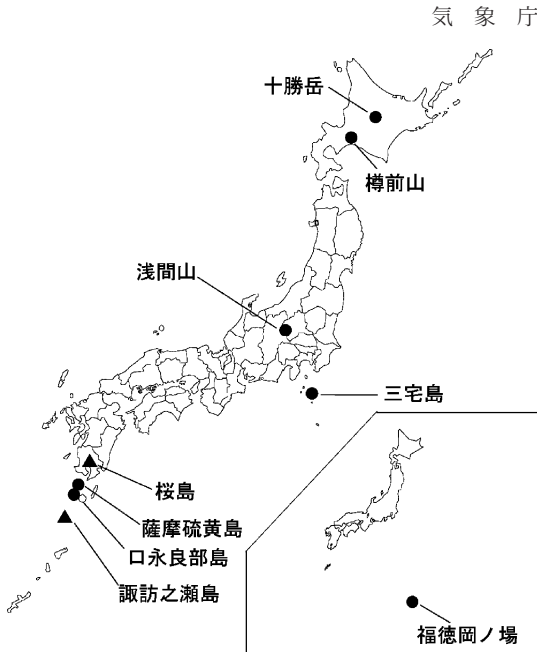


図 1. 2006年9月～10月に目立った活動があった火山

- ▲: 噴火した火山
- : 活動が活発もしくはやや活発な状態であった火山

● 十勝岳 (43°25′05″N, 142°41′11″E)

62-2 火口ではやや活発な噴煙活動が続いており、噴煙高度は火口縁上 100～200m で推移した。噴煙活動に特に変化はみられていないことから、同火口の熱活動にも大きな変化はなく、高温の状態が続いていると推定される。

火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は観測されなかった。地殻変動には特段の変化はなかった。

● 樽前山 (42°41′26″N, 141°22′36″E)

9月17日及び10月10日に行った現地調査では、山頂溶岩ドーム周辺の A 火口の最高温度は 500℃前後で依然として高温状態が続いていた。各火口の噴煙活動に特に変化はみられず、噴煙高度は火口縁上おおむね 50m 以下で推移した。

火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は観測されなかった。地殻変動には特段の変化はなかった。

● 浅間山 (36°24′23″N, 138°31′23″E)

火山活動は静穏な状況になった。

2005年6月以降、やや活発な状況で推移してきたが、火山性地震や火山性微動の回数、火山ガス放出量が低下するなど、火山活動は静穏な状態となった。

9月20日に行った山頂付近の現地調査では、火口底の一部に依然として高温部分が認められたものの、2005年8月以降の観測結果と比較して、高温部分の縮小傾向が認められ、火口内の熱活動は次第に低下している。

10月以降も噴煙活動はやや活発な状態が続いており、噴煙高度は火口縁上 100～200m で推移した。10月19日及び26日に実施した観測では、二酸化硫黄放出量は1日あたり 50～120t とやや少ない状態が続いている。地震活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

▲ 三宅島 (34°05′37″N, 139°31′34″E)

噴煙活動は引き続き活発で、多量の火山ガス（二酸化硫黄）の放出が続いている。

噴煙活動は引き続き活発で、噴煙高度は概ね火口縁上 200～300m で推移した。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。10月5日00時26分及び01時26分には空振を伴う低周波地震¹⁾が発生した。これらの地震発生時の噴煙の状況は雲のため確認できなかったが、5日早朝に行った現地調査では降灰は確認されず、地殻変動など他の観測データにも特段の変化はなかった。火山性微動は観測されなかった。

9月から10月にかけて行った観測では、山頂火口からの二酸化硫黄放出量は1日あたり 1,400～4,000 トンで、依然として多量の火山ガスの放出が続いている。

地磁気全磁力連続観測では特段の変化はみられていないことから、地下の熱的な状態に大きな変化はないものと考えられる。

GPS による地殻変動観測では、山体浅部の収縮を示す地殻変動は徐々に小さくなりながら、現在も継続している。

¹⁾ 三宅島では、空振を伴う低周波地震が発生した時に山頂火口から火山灰噴出を伴うことがある。

● 福徳岡ノ場 (24°17.1′N, 141°28.9′E)

9月13日及び10月4日に第三管区海上保安本部が、9月28日に海上自衛隊が行った上空からの観測では、火山活動によるとみられる変色水が確認された。

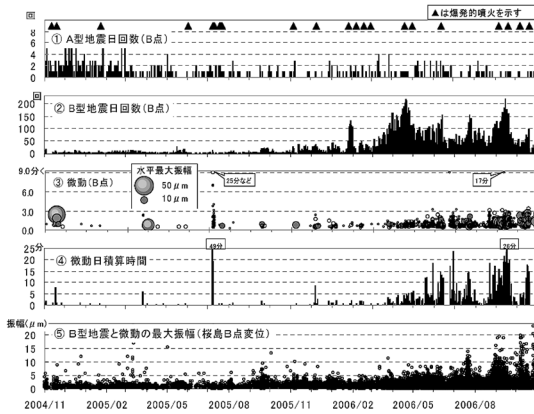


図 2. 桜島 火山性地震および微動の状況 (2004年11月～2006年10月)

▲桜島 (31°34'38" N, 130°39'32" E (南岳))

南岳山頂火口では、9月6日及び20日、10月7日、8日及び21日に爆発的噴火が発生したほか、小規模な噴火も時々観測された。10月21日の爆発的噴火による噴煙の最高高度は火口縁上2,000mで、噴石が6合目まで飛散した。昭和火口では、噴火は観測されなかったが、時折噴煙が確認された。

火山性地震や微動はやや多い状態が続いており、振幅のやや大きいものも時々発生した(図2)。

地殻変動観測では、始良カルデラの地下深部へのマグマの蓄積を示す長期的な地殻変動は継続しているが、桜島直下への大規模なマグマの移動を示す地殻変動は認められていない。

●薩摩硫黄島 (30°47'35" N, 130°18'19" E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや活発な状態が続いており、噴煙高度は火口縁上400～600mで推移した。

火山性地震はやや多い状態が続いている。継続時間の短い火山性微動が時々観測された。

●口永良部島 (30°26'36" N, 130°13'02" E (古岳))

新岳火口周辺で、膨張を示す地殻変動や熱活動の高まりが観測されている。

2005年7月以降火山性地震は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。また、火山性微動が10月以降増加し、やや多い状態となっている。

京都大学防災研究所附属火山活動研究センター及び産業技術総合研究所のGPSによる地殻変動観測では、9月頃から新岳火口付近で膨張を示す変化が認められてい

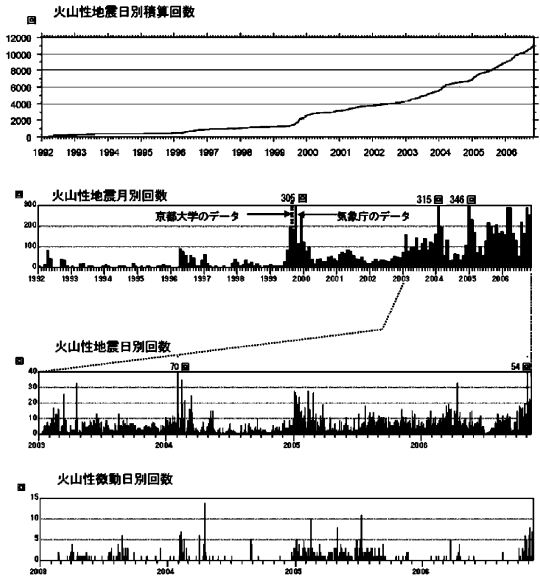


図 3. 口永良部島 火山性地震及び火山性微動の発生状況 (1992年1月～2006年10月)

る。気象庁が10月30日から11月1日にかけて新岳火口付近で稠密に行ったGPSによる地殻変動観測でも、新岳火口付近の膨張を示す変化を確認した。

10月19日に鹿児島県の協力により京都大学と気象庁が、10月30日に第十管区海上保安本部の協力により気象庁が行った上空からの観測によれば、2005年2月の観測に比べ、新岳火口周辺で熱活動の高まりを示す変化が認められた。監視カメラ(新岳の北西約4kmに設置)による観測では、噴気は認められなかった。

▲諏訪之瀬島 (29°38'18" N, 129°42'50" E (御岳))

10月6日及び16日から18日にかけて爆発的噴火があったほか、小規模な噴火も時々発生した。噴火に伴い、火山性連続微動が観測された。十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、9月22日及び26日、10月2日、7日及び11日に集落(御岳の南南西約4km)で降灰が認められた。火山性地震はやや多い状態で経過した。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

火山活動解説資料

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責: 気象庁地震火山部火山課 相澤幸治)